

# 藤戸

世阿弥作

季は	地は	後	前
三月	備前	ワキ シテ 漁夫	シテ 佐々木盛綱 漁夫の母
		前に同じ	

「春の湊の行末や。／＼。藤戸の渡りなるらん。

詞  
「是は佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕りし御恩賞に。児島を賜はつて候。今日は日もよく候ふ程に。唯今入部仕り候。

道行  
「秋津洲の。波静なる島廻り。／＼。松吹く風も長閑にて。實に春めける朝ぼらけ。船も道ある浦づたひ。藤戸に早く着きにけり。／＼。

詞  
「如何に誰かある。

トモ  
「御前に候。

ワキ  
「皆々訴訟あらんずる者は罷り出でよと申し候へ。

トモ  
「畏つて候。如何に皆々たしかに聞き候へ。此浦の御主佐々木殿の御入部にて有るぞ。何事も訴訟あらん者は罷り出でゝ申し候へ。

ワキ  
「老の波。越えて藤戸の明暮に。昔の春の帰れかし。「不思議やな是なる女の。訴訟ありげに某を見てさめぐと泣くは何事にあるぞ。

シテ

「海士の刈る藻に住む虫の我からと。音をこそ泣か  
め世をば實に。何か恨みん本よりも。因果の廻る  
小車の。弥猛の人の罪科は。皆報いぞといひなが  
ら。我子ながらも余り實に。科も例も波の底に。  
沈め給ひし御情なさ。申すにつけて便なけれども。  
御前に参りて候ふなり。

ワキ 「何と我子を波に沈めし恨みとは更に心得ず。

シテ詞 「さてなふ我子を波に沈め給ひし事は候。

ワキ 「あゝ音高し何とく。

シテ 「なふ猶も人は知らじとなふ。中々に其有様を顕し  
て。跡をも弔ひ又は世に。生き残りたる母が身を  
も。訪ひ慰めて給び給はゞ。少しほは恨みも晴るべ  
きに。

下歌 「いつまでとてか忍ぶ山。忍ぶかひなき世の人の。  
あつかひ草も茂き物を。何と隠し給ふらん。

上歌 「住み果てぬ。此世は仮の宿なるを。く。親子と

て何やらん。幻に生れ来て。別るれば悲しみの。

思ひは世々を引く。絆と為つて苦しみの。海に沈め給ひしを。せめては訪はせ給へや。跡弔はせ給へや。

ワキ詞

「言語道断。かゝる不便なる事こそ候はね。今は何をか包むべき。其時の有様語つて聞かせ候ふべし。近う寄つて聞き候へ。さても去年三月廿五日の夜に入りて。浦の男を一人近づけ。此海を馬にて渡すべき所やあると尋ねしに。彼者申すやう。さん候河瀬の様なる所の候。月頭には東にあり。月の末には西にあると申す。即ち八幡大菩薩の御告と思ひ。家の子若党にも深く隠し。彼者と唯二人夜にまぎれ忍び出で。此海の浅みを見置きて帰りしが。盛綱心に思ふやう。いやく下郎は筋なき者にて。又もや人に語らんと思ひ。不便には存じ、かども。取つて引き寄せ二刀さし。其まゝ海に沈

めて帰りしが。さては汝が子にてありけるよな。  
よしく何事も前世の事と思ひ。今は恨みを晴れ  
候へ。

シテ詞  
「さてなふ我子を沈め給ひし。在所は取り分き何処  
の程にて候ふぞ。

ワキ  
「あれに見えたる浮洲の岩の。少し此方の水の深み  
に。死骸を深く隠しゝなり。

シテ  
「さては人の申しゝも。少しも違はざりけり。あの

辺ぞと夕波の。

ワキ  
「夜の事にて有りし程に。人は知らじと思ひしに。

シテ  
「やがて隠れはなき跡を。

ワキ  
「深く隠すと思へども。

シテ  
「好事門を出です。

地  
「悪事千里を行けども。子をば忘れぬ親なるに。失

はれ参らせし。子はそもそも何の報いぞ。

クセ  
「實にや人の親の。心は闇にあらねども。子を思ふ

道に迷ふとは。今こそ思ひ知られたれ。本よりも定めなき。世の理りはまのあたり。老少不定の境なれば。若きを先立てゝ。つれなく残る老鶴の。眠りの内なれや。夢とぞ思ふ親と子の。二十余年並。かりそめに立ち離れしをも。待ち遠に思ひしに。又いつの世に逢ふべき。

シテ「世に住めば。憂き節繁き河竹の。

地「杖柱とも頼みつる。海士の此世を去りぬれば。今

は何にか。命の露を懸けてまし。ありがひも有らばこそ。とてもの憂き身なる物を。亡き子と同じ道に。なして給ばせ給へと。人目も知らず臥し転び。我子返させ給へやと。現なき有様を。見るこそあはれなりけれ。

「あら不便や候。今は恨みてもかひなき事にて有るぞ。彼者の跡をも弔ひ。又妻子をも世に立てうづるにてあるぞ。まづ我屋に帰り候へ。如何に誰か

ある。余りに彼者不便に候ふ程に。さまぐの弔ひをなし。又今の母をも世に立てうずるにて有るぞ。其由申し付け候へ。(中入)

ワキ歌  
「さまぐに。弔ふ法の声立てゝ。ゝ。波に浮寐の夜となく。昼とも分かぬ弔ひの。般若の船のおづから。其纜を説く法の。心を静め声を上げ。

ワキ  
「一切有情殺害三界不墮悪趣。

後ジテ  
「憂しや思ひ出でじ。忘れんと思ふ心こそ。忘れぬ

よりは思ひなれ。さるにても身はあだ波の定めなくとも。科によるべの水にこそ。濁る心の罪あらば。重き罪科も有るべきに。よしなかりける海路のしるべ。思へば三途の瀨踏なり。

ワキ  
「不思議やな早明方の水上より。けしたる人の見えたるは。彼亡者もや見ゆらんと。奇異の思ひをなしければ。

シテ詞  
「御弔ひは有難けれども。恨みは尽きぬ妄執を。申

さん為に來りたり。

ワキ 「何と恨みを夕月の。其世に歸る浦波の。

シテ詞 「藤戸の渡り教へよとの。仰せも重き岩波の。河瀬

の様なる浅みの通りを。

ワキ 「教へしまゝに渡りしかば。

シテ 「弓矢の御名を揚ぐるのみか。

ワキ 「昔より今に至るまで。馬にて海を渡す事。

シテ 「希代の例なればとて。

ワキ 「此島を御恩に賜はる程の。

シテ 「御よろこびも我故なれば。

ワキ 「如何なる恩をも。

シテ 「給ぶべきに。

地 「思ひの外に一命を。召されし事は。馬にて海を渡すよりも。是ぞ希代の例なる。さるにても忘れがたや。あれなる浮洲の岩の上に。我を連れて行く水の。氷の如くなる刃を抜いて。胸のあたりを刺

し通し。刺し通さるれば肝魂も。消え／＼となる  
処を。其まゝ海に押し入れられて。千尋の底に沈  
みしに。

シテ  
「をりふし引く汐に。

地「をりふし引く汐に。引かれて行く波の。浮きぬ沈  
みぬ埋木の。岩のはざまに流れかゝつて。藤戸の  
水底の。悪龍の水神となつて。恨みを為さんと思  
ひしに。思はざるに御弔ひの。御法の御船に法を

得て。即ち弘誓の。船に浮へば水馴棹。さし引き  
て行く程に。生死の海を渡りて。願ひのまゝにや  
すくと。彼岸に至り／＼て。／＼。成仏得脱の  
身となりぬ。成仏の身とぞなりにける。